

おぼろけに人目思はずは、ひきもとどめたてまつる
並一通りではなく世間体を気にするのでなければ、
引きとめ申し上げるにちがいないけれど、

べけれど、ウカしうじ思ひしむ。

(中納言は) 賢明にも差し控える。

内裏より皇子出でさせ給ひて、御遊びはじまる。

内裏から皇子がお出ましあそばして、

管絃の演奏が始まる。「(中納言は)

何のものの音もおぼえぬ心地すれど、今宵を

どんな音楽の音も何とも感じられない気がするけれども、

(この中国から) 今夜を

かぎりと思へば、心強く思ひ念じて、琵琶賜はり

限り(に去るのだ)と思つと、
気丈に堪えて、

(皇子から) 琵琶を頂戴

給ふも、うつつの心地はせず。

ななるも、

現実だという気持ちはしない。

御簾のうちに、琴のごとかき合はせられたるは、

御簾の中で

琴「きん」の琴を(琵琶に)合わせてお弾きになっているのは、

未央宮にて聞きしなるべし。

未央宮で聞いた(のと同じく、后が奏でている)音色であるにちがいない。

(弾いていた琴を、后は)

やがてその世の御おくりものに添へさせ給ふ。

そのまま

この国の別れの贈物に

加えなされる。

「今は」といふかひなく思ひ立ち果てぬるを、

「今となつては」と后とのこと(は)どうしようもないと(諦めて)決心してしまつたのに、

いとなつかしうのたまはせつる御けはひ、

(后の声の) 御勢困気、
とても親しみ深く仰つた

ありさま、耳につき心にしみて、肝消えまどひ、

様子が

(中納言の) 耳につき、心にしみこんで、

ひどく気力も萎え、

さらにものおぼえ給はず。

すっかり正気を失っていらつしやる。

「日本に母上をはじめ、大将殿の君に、見馴れし
「日本に、母上をはじめ、大将殿の姫君と深い仲になつて

ほどなく引き別れにしあはれなど、エたぐひあらじと
間もなく別れて来てしまった時のしみじみした悲しみなど、ほかに比べようもあるまいと、

人やりならずおぼえしかど、
自分で決めたことながら、そう感じられたけれども、

ながらへば、三年がうちに行き帰りなむと思ふ思ひ
もし生きながらえたならば、きつと三年以内(日本に)帰つてと思つ気持さで

になぐさめしにも、胸のひまはありき。
(自分を)慰めたこともあつて、心の休まる時はあつた。

これは、またかへり見るべき世かは「と思ひとぢむ
(うかし)こはらの国は、再来できる国だろうか、いざ、できませう」と断念する、

るにオよるづ田とまり、あはれなるをちるじとじて、
あれやこれやと田がとまり、しみじみと感慨が深まるのは当然のことであつて、

後の、今ひとたびの行き逢ひをば、
后が、(中納言との)もう一度の逢瀬について、

かけ離れながら、
(中納言と)距離をとりながら、

おほかたにいとなつかしうもてなしおぼしたるも、
だいたいとはとても親しみ深く、待遇しようとお思ひになつてゐるのにつけても、

さまざまなる心づくしいとどまをりしつ、
(中納言は、)異様な物思ひの限りを尽くし、ますます心労が繰り返し積み重なり、

わが身人の御身、さまざまに乱れがはしきごと出で
自分の身や後の御身にとつて、(二人の仲が露見してしまつと)様々にごたごたしたことがきつと起りそう

来ぬべき世のつしましさを、
な世の遠慮すべきこと(=自分との再びの逢瀬)を、

おぼしつめるとわりも、
(后が)遠慮なさつてゐる判断に対しても、

ひたぶるに恨みたてまつらむかたなければ、
むやみに お恨み申し上げる筋合いもないので、

いかさまにせば、と思ひ乱るる心のうちは、
「いったいどのようになり（いいの）か」、「と悪く混雑する心の中は、

言ひやるかたもなかりけり。
言ひ返くしようもなかったのだった。

「いとせめてはかけ離れ、なさけなく、じらく
「本当に（后が）強いて距離を置き、 情愛もなく、 冷淡に

もてなし給はばいかがはせむ。
おめしひいになるなり、（べうじたらいいの）か、（べうじようもない）と諦めることが出来る。

若君のかたがまにつけても、カわれをばひたぶるに
（私との間に生まれた）若君の方面「存在していること」から考えても、私のことは、ひたすらに

おぼし放たぬなんめり」と、
見捨てなされることはないようだ」と、

推し量らるる心ときめきても、消え入りぬべく
ついそう推し量られる心がときめきはしても、（別離という現実には、中納言は）正気を失ってしまいそうに

思ひ沈みて、暮れゆく秋の別れ、キなほいとせちに
思い沈んで、 暮れゆく秋の別れ（の悲しさが）、 やはりとても切実で、

やるかたなきほどなり。
心を晴らす方法が無いほどである。

御門、東宮をはじめたてまつりて、惜しみかなしま
御門や東宮をはじめとし申し上げて、 （中納言との別れを）惜しみお悲しみ

せ給ふさま、わが世を離れしにも、やや立ちまさり
あそばす様子は、 わが日本を離れた時よりも、 少し目立ってまざっている。

たり。